

イメージ発想に関する研究(1)

田 川 典 子
林 眞 幾 子

はじめに

戦後教育の混沌とした中で「創造的な人間形成」がさげばれ、ダンスによる教育もその一役を担ってきた。その中で、常に思考の基盤にあることは「からだの動き」を媒介とする創造教育であるという見識であるが、同時に「表現する」という目的ぬきにダンスを語ることもできない。また、表現運動が主としてかかわるのは美的・芸術的情操であるが、路傍の小さなすみれを愛おしく思ったり、四季の移りに心がうごかされたりという、さまざまな美的経験の中から生まれ育つ情操を高めることが、教育的見地からは求められているのである。

試行の過程では、授業という限られた時間を動きの練磨に傾注した時期もあり、一方“つくる”という活動のみが主として浮きぼりにされた時期もあったように思われる。確かに“Dance Technique” “Creative Activity” “Evaluation” という大きなねらいを限られた時間の中で達成することは容易なことではない。しかし、「何を」「どんな動きで」「どんなふうに」表現するのか、このことが一体となって考慮されなければダンスの本質を満たすことにはならないのである。

本学学生の場合、授業でみられる限りでは動きの工夫や作舞法について年々向上しているようである。むしろ、環境の変化や情報文化の洗礼をうけて、リズム中心のダンシングへの興味は著しく、踊る行為そのものへ抵抗を示す学生は非常に少なくなっている。しかしこの反面、舞踊発想の基となる心象的なもの、つまり「何を伝えたいのか」という心の意識は稀薄で、踊りそのものに自己陶醉はできても表出しようとするものへの自覚や陶醉感がなく、感覚的感情やイメージの広がり、またテーマを適確に表わす語彙の不足も含めて、思考過程が貧しいという傾向を痛感させられる。

無論、指導者の資質も問うべきこととは思うが、前述の、美しいものを美しいものとして感じとれるような情操や豊かな感性は、成長する過程の中で強く育まれていくものではなかろうか。そして、この豊かな感性やイメージの広がりが舞踊発想に不可欠の要因であることはいうまでもないことである。

そこで本研究は、本学学生の舞踊発想に至るまでを追跡調査し、種々の点との関連を追求することでその実態を把握したいと考えた。なお本稿は、舞踊発想の基となる「イメージ」についてをあらためて明確なものとし、更に第一回資料として学生の幼児体験調査を実施の上、情緒性の下地や自己主張の度合等の傾向を抽出、報告することで第一報とする。

I. イメージと想像力・創造力

1. イメージ

幼稚園児であった頃の記憶であろうか、さかんにお店やさんごっこという遊びをした思い出がある。同年代の子どもを相手に、軒下にゴザを敷き枯葉や石ころを並べて野菜や果物にみたくて、おしゃまにも母親の口調を真似て「〇〇を下さいな」「いくらですか」「10円です」云々とやりとりをするのである。お金は母の裁縫箱からもちだしたいくつかのボタンだったような気がする。そしてその遊びも日々の経過と共に漠然としたお店やさんがいつしか八百屋や魚屋等の明確な違いをもちはじめ、ボタンのお金が紙をちぎって紙幣のようになり、売り手や買い手、更にはお金をつくる人(銀行のことだったように思う)まで分業をしていった。

今、身近な子どもたちをみていると職種や商品の種類は異なってはいても、当時と同じようにお店やさんごっこ(時にはスーパーマーケットであったりしながら)が繰り返されているのに気づく。そして日をおいてまたみると、明らかに商品の種類が増えたり会話の内容が豊富になっていることも共通している。

これと同じようなことが、ままごと遊びや電車ごっこ・探検ごっこ等にもみられるが、中沢和子¹⁾によると、「ごっこ遊び」は普通子どもがおとなの社会の生活・行動様式を真似る遊びの総称として使われ、3才前後から起り始めて集団に加わることによって急速に発展するという。そして「単なるしぐさや単一のなぞり行動ではなく、必ずひとまとまりの構造を時間経過をもち、人間関係を伴うのが特色である」といっている。確かに台本のない筋書きを次々とよどみのない台詞で進行し、それが更にどんどん広がりのあるものへ変化していく子どもの世界をみていると、会話の滑稽さにふきだしながらも、よくみている・よくしていると驚嘆させられる。中沢は、「ごっこは社会生活の引き写しであるから、子どもが社会を観察してイメージを蓄え、自分の行動として表出できる程度に確実なファイルをもっていなければ起こらないことである」ともいっている。このことから、お店やさんごっこが次第に分業を起こしたりすることは、社会生活の中の欠落部分に気づいた子どもが、現実社会の観察を深めることによってイメージを正確にしこれを出すと、イメージ操作の一つの表われとみてよいのだろうと思う。

イメージとは「思い浮かべようとしてあらためて心の中につくるものではなく、過去の体験の中でその実物についてつくられている心像(記憶像)」である。イメージと同意語のようにしてつかう「想像」は、広辞苑によると「現実の知覚に与えられていない物事の心像(イメージ)を心に浮かべること。過去の経験を再生する場合と、過去の経験を組み合わせて新しい心像をつくる場合とがある」ということであるが、このことは、イメージをうごかす、つまりイメージ操作という時間経過をもつものとして、「イメージ」そのものとあらためて区別して理解したい。従って、体験が多いほど、また観察が鋭いほど豊富に克明に心の中にファイルされて、これがイメージ誕生のベースとなるものと考えられる。

生活と密着する中で、視覚・聴覚・触覚等を通してさまざまに体験したことが、再現され、心の中で操作され、変容し更には社会性をもった遊び等の中で交流することで、確実にイメー

ジ・想像の世界が育っていくのであろう。そして、変化する子どもの行動や会話をみききすると、外界の変化については全く受身で自己の身体状況についてのみ自己主張する誕生まもない赤ん坊の頃から、明らかにイメージの蓄積があり、イメージ操作を繰り返すなかで学習し人間として成長していることの結果であろうと確信する。

2. 想像力

竹内敏晴は「ことばが劈かれるとき」²⁾の中で、ウソは想像力、すなわち創造力の現われだ。子どもは実に真剣に実に楽しそうにウソをしゃべっているときがある。もちろん道義的に許してはならぬウソもあるが、それは社会的訓練としてけじめを教えねばならぬことで、ウソそのものを抑えたら子どもは萎縮してしまうと述べている。そして、この「ウソ」を話し、演じること、これが普通に演技と呼ばれる行為である。演技はウソがなければ成り立たない。というより、演技は想像力としてのウソそのものの発現である、という。

もちろん「ウソ」が生まれるときには、それ以前に必ず経(体)験した事実があり、イメージされたものが合成されたり他の事実と組みかえられたりして表出されるのであろう。説得力のある「ウソ」ほど、すじみちがしっかりとしているものである。この巧みにイメージ操作する力こそ、想像力であるということではなかろうか。

広辞苑で確認すると、「想像する心的能力あるいは哲学上(カント)では感性と悟性とを関係づける能力を意味する」とある。つまり、視覚的感情(形や色彩)、聴覚的感情(音響)等感覚に伴って生ずる感情などを含めて、外界の刺激をうけとめる感受性とそれに基いて論理的に思考する力があいまって想像力を生むものと理解したい。

中沢の言をかりれば、「想像力とは、必要に応じてイメージを取りだし、必要に応じてこれを順序どおり配列していく力」である。従って、どんなにたくさんのイメージがあってもその断片を無秩序に出没させるだけでは想像力とはいえないのである。イメージに秩序を与えるのは体験であり、操作の力(想像力)は、その事実・イメージ・表出の3点の間で繰り返されることによって養われるものとする。

また、事実をどう受けとめるか、イメージをどう蓄えるかは、研ぎすまされた神経やこまかな感情・もののあわれをよく知るといような感受性の役割によるところが大であろうと思われる。更に「自分自身のもつ『感じ—感覚・感情—』を検討し、間違っていないか、錯覚ではないかと研究してみる。自分の『感じ』に頼りきってしまうことなく解放的な態度を涵養し、人の話を聴こうとする謙虚な努力をする」³⁾ことが、思考の柔軟性を増し想像力を育くむことになるのではないだろうか。想像力を育てようとするならば、おとなのイメージと噛みあわない部分であっても、まずその子どもの豊かな想像力をまず認めることが大事であることはいうまでもない。

3. 創造力

霜田静志⁴⁾は創造力の特徴として

- 1) 感受性
- 2) 柔軟性(融通性、流動性を含む柔軟な心のはたらき)

3) 分析と総合(再決定及び再構成, さらに心像を分析・抽象することによって明らかにし新しい体系をつくる力)

4) 構成力(独創的かつ組織に一貫性をもたせる表現能力)

の4つの力をあげ、創造性を発揮するための基礎能力として重要だといっている。そして、創造的表現の心理過程は未整理だとしながらも、「意識的であるよりは無意識的心理過程である」とみられる。創造的な心理の動き出す原動力は感受性にもとづき、その自由な動き・柔軟性にあることは疑いない。加えて、これに対し分析したり総合したりする意識的活動が行われる。その間によく、これだという確定的な方向を見出し、構成力をはたらかせて素晴らしい創造的表現を完成する」と心理過程を考察している。また、恩田彰⁵⁾は、日常的なものに「問題」を感じるところに創造への第一歩があると、創造的才能についてトランスの定義を引用し、「問題・欠陥・知識のギャップ・不足な点・不調和などに敏感になり、困難点をみつけ解決をさがし、推測したり欠陥に関する仮説を作り、その仮説をテストし、再テストし、おそらく修正して再テストし、最後にその結果を伝える」ことだと述べている。確かに著明な発明・発見家から街の発明家まで、その多くは日常生活の中で自分も含めて周囲の人々が欲しているものに対する感覚が鋭敏な人であったときいている。しかしこの反面、通常は共通の通念(誰もがもっているイメージ)により生活が営まれている社会で、一般通念以上の感覚(イメージ)をもち続ける人は少なく、この場合は一般通念を外れた部分だけが注目されて変わり者というレッテルがはられることが多い。たまたまその表出が一般通念からみて価値があると認められたときだけ創造性が認められているのではないだろうか。発明・発見家や画家・音楽家・舞踊家たちの中には、その創造的な仕事はその時代に受け入れられず、死後数十年を経過してようやく認められたという例は枚挙にいとまがない。

創造力の特徴を考えると、みずみずしい感受性を見逃すことはできないが、この感受性の裏付けは蓄えたイメージの豊かさによって支えられている。

舞踊家が、あたため続けたイメージに自分の内面のすべて、あたかも自らの生き方そのものを映し出すかのように実物を超えた深く広い独自のイメージをつくり、絶えず練られた肉体とテクニックを駆使して踊る時、そこには自ずから感動が生まれる。美しいものに対し、またそこに起こっている問題に対し、敏感にそれを感じとる力、それが何より大切なのではなからうか。霜田は、「何をみても、いっこうに感ずるということもなく、疑問もおこさない人では、創造というような能動的なはたらきに進むことはできない」と述べている。

II. 学生の幼児体験調査

1. 対象 : 東京女子体育大学 昭和56年度2年生, 186名
2. 方法 : 質問紙法による調査
3. 調査期日 : 昭和56年10月22日, 26日
4. 調査内容 : 次頁(調査用紙参照)の通りであるが、Iは本人の履歴を中心に、IIは家庭環境を中心に、IIIは成長の過程での体験として、2~10は情緒性の下地, 11~15は自己主張の度合, IVの1~2は芸術環境, 3~7は初歩的芸術体験,

ダンス 授業用 < 環境及幼児体験の調査 >

これはダンスに必要な発想力を考えるための資料となります。該当するものに○又はことばを記入して下さい。

- I 1. 氏名() 2. 生年月日(昭和 年 月 日) 3. 家族構成()
 4. 学歴(①保育園・幼稚園 ②公立・私立小学校 ③公立・私立中学校 ④公立・私立 高等学校
 科 ⑤男女共学・女子のみ) 5. 得意学(小学校・1. 国語 ②算数 ③社会 ④理科 ⑤体育 ⑥音楽 ⑦図工 ⑧家庭
 中学校・1. 国語 ②数学 ③地理 ④歴史 ⑤生物 ⑥英語 ⑦保健体育 ⑧音楽 ⑨美術 ⑩家庭 その他 高等学校
 1. 現代国語 ②音楽 ③代数 ④幾何 ⑤地理 ⑥歴史 ⑦生物 ⑧化学 ⑨物理 ⑩外国語 ⑪保健体育 ⑫美術 ⑬音楽 ⑭家庭
 ⑮その他 () 6. クラブ歴(中学校 高等学校)

- II 1. 両親の職業(父 母) 2. 家屋(①幼児期・1. 一戸建 ②アパート型式 ③長屋型式 ④学齢期・1. 一戸建
 ②アパート型式 ③長屋型式) ③ 現在の・1. 一戸建 ②アパート型式 ③長屋型式) 3. 周囲の環境(①幼児期・1. 住宅地 ②商店街
 ③山間部 ④農村地帯 ⑤河川地帯 ⑥海浜観光地 ⑦その他) ② 学齢期・1. 住宅地 ②商店街 ③山間部
 ④農村地帯 ⑤河川地帯 ⑥海浜観光地 ⑦その他) 4. 小さい頃の遊び(①主観仲間・1. 男子 ②女子 ③両方
 ④大人 ⑤年上の子供 ⑥同年代の子供 ⑦年下の子供 ⑧自分一人) ② 主な遊び場・1. 家の中 ②路上 ③公園・遊園地 ④校庭
 ⑤海浜 ⑥川 ⑦田畑・草地 ⑧その他) ③ 主な遊び・1. おびきや石けり等主に女の子の遊び ② ビューティフル等に男の子
 の遊び ③ お絵かきや積み木など主として静かな遊び ④ ごっこ遊びや競争を主とした活発な遊び ⑤ ボールゲーム等のスポーツ ⑥ その他)
 5. 家庭のしつけは(1. きびしかった ② 必要なことだけを教えた ③ 放任だった ④ その他) 6. きびしかったのは
 (1. 父親 ② 母親 ③ 両親共 ④ 祖父 ⑤ 祖母 ⑥ その他) 7. 嫌にしなければ(1. 礼儀 ② 言葉使い ③ 作法 ④ 勉強
 ⑤ その他) 8. 幼児体験の中で危険なことをやらせておいては(1. 常に制止が
 ② 体験してからとささいなものが多かった ③ 全く自由だった ④ その他) 9. 兄弟姉妹のことは(1. 優位に立っていた
 ② いつもおこられた ③ いつも比較された ④ 平等だった ⑤ その他)

- III 1. 成長の過程の中で主に(1. 父 ② 母 ③ 祖父 ④ 祖母 ⑤ 兄弟 ⑥ 叔父 ⑦ 叔母 ⑧ その他)の育てられ。
 2. 小さい頃は主に(1. 広い場所 ② 狭い場所 ③ どちらともいえない)にいる又は遊ぶことが好きだった。
 3. 小さい頃は主に(1. 一人 ② 複数 ③ 多人数 ④ どちらともいえない)でいる又は遊ぶことが好きだった。
 4. 小さい頃に(1. 野菜・泥の入れかきや田植え ② 虫取り ③ 魚取り ④ 草花摘み ⑤ 動物の飼育 ⑥ 星の観測 ⑦ 木登り ⑧ その他)
 等、自然と親しんだ体験をもっている。
 5. 小さい頃から季節の移りかたの中にある自然や行事に親しむことが(1. 多かった ② 余りなかった ③ どちらともいえない)
 6. 小さい頃から(1. 自然の環境 ② 遊園地や遊歩道等人工的な場所 ③ 家の中 ④ その他)にいる方が好きだった。
 7. 小さい頃から喜びや悲しみの表情を(1. 表に出す ② 包み込んでしまう ③ 状況によってどちらともいえない)方だった。
 8. 小説や映画等の悲しい場面では(1. すく泣く ② 涙を流す ③ 涙を流すこともある ④ 感じない)方だった。
 9. 自分より年下の子供の面倒は(1. とことんみる ② みるが途中であきらむことが多い ③ みる)方だった。
 10. 育てられた仔犬又は小動物をみつけると(1. すくに抱きあげてもち上げる ② 抱きあげて愛おしいと思うがそのまま ③ 可愛いわいと思うがそのまま ④ 何にも感じない ⑤ 怖い ⑥ その他)方だった。
 11. 着る物について(1. 自分で選べる ② 買ってもらった中で選ぶ ③ 関心がない)方だった。
 12. みだしなみについて(1. とてもオシャレ ② かわいくない ③ どちらともいえない)方だった。
 13. 洋服やおもちゃなどは(1. 既製品 ② 親や誰かが作った ③ 両方 ④ 無関心)のものが嬉しかった又は好きだった。
 14. 自分の持ち物(1. とても大切に ② 乱暴にあつかった ③ すぐ他のものに取られた ④ 忘れ物が多いが大切に ⑤ 大切に ⑥ 大切に)
 15. 他人の洋服やおもちゃなどについて(1. 触れてはならない ② なくてもかまなかった ③ 自分にあるもので満足した ④ 全く気にしない)方だった。

- IV 1. 家族は芸術・芸能的なことが(1. 好き ② 嫌い ③ どちらともいえない)
 好きな場合の種類は(1. クラシック音楽 ② 流行音楽 ③ 民族舞踊 ④ 絵画・彫刻 ⑤ 演劇 ⑥ 映画 ⑦ 文学 ⑧ 舞踊 ⑨ 写真 ⑩ 茶華道
 ⑪ その他)
 2. 家族の中に芸術的なことと専門職の人が(1. いる ② いない) いる場合は誰か(1. 父 ② 母 ③ 兄弟 ④ 姉妹 ⑤ 祖父 ⑥ 祖母 ⑦ 叔父 ⑧ 叔母 ⑨ その他)
 の種類は何か()
 3. 小さい頃はよく本を読むことが(1. 好き ② 嫌い ③ どちらともいえない)だった。 その本は(1. 絵本童話 ② 少女小説 ③ 文学小説 ④ 詩集
 ⑤ 推理小説 ⑥ 専門書 ⑦ 漫画 ⑧ その他)
 4. 小さい頃はよく音楽を聞く機会が(1. あった ② なかった ③ どちらともいえない) その音楽は()
 5. 小さい頃は(1. 作文又は詩を書く ② 作曲する ③ 歌をうたう ④ 演奏する ⑤ 絵を描く ⑥ 粘土細工や模型などを作る ⑦ おもちゃを作る ⑧ 踊る
 ⑨ その他)のことが(1. 好き ② 嫌い ③ どちらともいえない)だった。
 6. 小さい頃に習いごと・資格を(1. した ② なかった) それは(1. 習字 ② 絵画 ③ ピアノ・楽器 ④ 劇団 ⑤ 合唱団 ⑥ 舞踊
 ⑦ 創作 ⑧ 茶道 ⑨ その他)
 7. その時期は(環境から ① 保育園の間 ② 小学校3年までの間 ③ 小学校5年までの間 ④ 中学校卒業までの間 ⑤ 高校卒業までの間 ⑥ 現在)である
 8. 小さい頃は人前で話したり発表したりすることが(1. 好きだった ② 嫌いだった ③ どちらでもない)
 9. 絵や作文を書く・ものをつくる時にテーマは(1. すくに決まっていた ② 時間があるからこれかと思いつくものから ③ 好きなものから)
 10. テーマがみつかり(1. 同時にイメージが浮かぶので制作できた ② 次にイメージが浮かぶので制作できた ③ イメージが浮かぶので制作できた)
 11. 制作は(1. 比較的時間があつたから ② 短時間のほうがよかった ③ 決まった時間範囲で ④ その他)

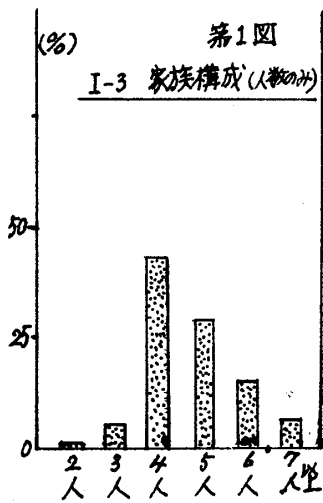
- V 1. 学芸会などは(1. 積極的に参加した ② 積極的に参加しなかった ③ 全く消極的だった)
 公演については(1. 積極的に ② 消極的に ③ どちらでもない)
 2. 自分が作ったこと・ものに対して注意をうける(1. 素直に認めた ② 更に発散的に ③ いやだと思いつつ続けた ④ なかった)
 3. 自分は(1. 与えられたことややる方が好きだった ② 自分で工夫してやる方が好きだった ③ どちらともいえない)

9~11は思考性, IVの8及びVの1~3は行為・行動性を探る意図で項目設定した。

III. 結果および考察

<項目Iについて> 第1~2図参照

特に顕著なことは、まず一人っ子または長女が圧倒的に多く全体の約78%を占めていることである。また両親を入れて4人~5人家族が多く、昭和37~38年に生まれていることから、ちょうど社会が核家族化しつつある状況で育っていることがわかる。また得意学科として(保健)体育をあげているものが圧倒的に多いことは本学を志望したことであらざるを得ないが、小学校

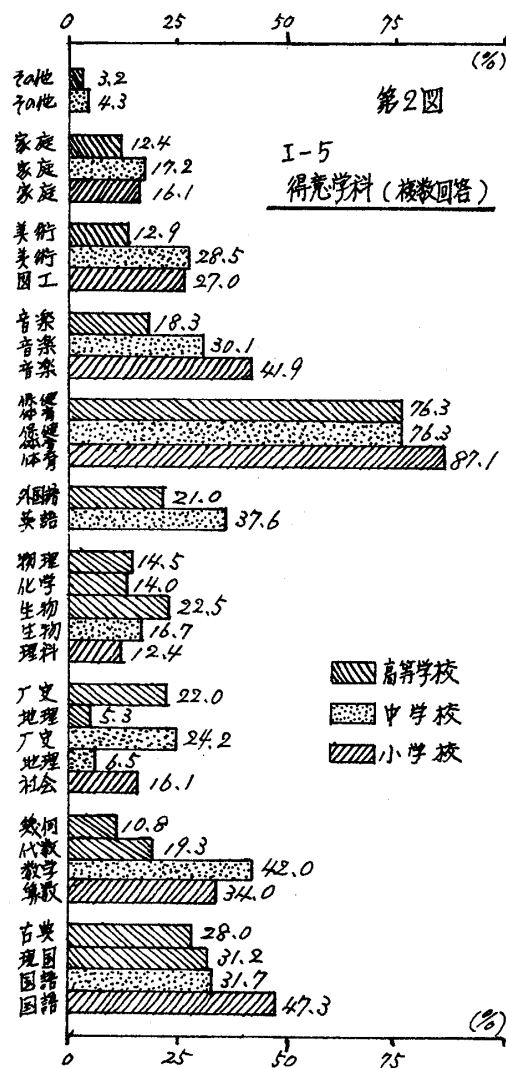


第1表

住宅地	55.9%
商店街	15.2
山間部	4.3
農村地帯	20.4
漁村地帯	1.6
海浜親地	0.5
その他	2.1

第2表 (複数回答)

男子	12.9%
女子	13.4
西方	71.0
大人	1.0
年上の子供	30.1
同年代の子供	65.6
年下の子供	23.7
自分一人	4.8



第3表 (複数回答)

II-4 小さい頃の遊び場	家の中	30.1%
	路上	49.0
	公園・遊園地	44.7
	校庭	46.8
	海辺	4.3
	川	14.5
	田畑・草地	26.9
	その他	8.1

第4表 (複数回答)

II-4 小さい頃の遊び	お宝探し等	18.8%
	ビュウウ等	18.8
	お宝探し等	9.1
	ぶらぶら遊び等	91.9
	ボールゲーム等	58.1
	その他	2.7

第5表

II-5 家庭のしつけ	きびしかった	42.5%
	必要最低限のしつけのみ	52.2
	自由放任	4.8
	その他	0.5

第6表

きびしかったのは	父親	18.4%
	母親	46.8
	両親共	25.8
	祖父母	6.0
	その他	1.2
	N.A	1.8

第7表

特にしつけられたこと	礼儀	82.8%
	言葉使い	50.5
	作法	49.2
	勉強習慣	17.2
	遊び習慣	2.7
	友達関係	9.1
	その他	0
N.A	1.6	

第8表

II-8 受験や入学した時に感じ	常に制止	15.6%
	体験しかな	71.0
	全く自由	11.4
	その他	1.0
N.A	1.0	

第9表

II-9 兄弟姉妹のことは	優位だった	14.0%
	いいお兄さん	13.4
	いいお姉さん	6.3
	平等だった	55.4
	その他	8.1
	N.A	2.8

第10表

II-2 遊び場	広い場所	62.4%
	狭い場所	10.8
	どろどろい場所	26.8
II-3 仲間	一人か2人	2.2
	複数	52.2
	多人数	34.9
II-4 自然とのふれあい (複数回答)	どろどろい場所	10.7
	自然のふれあい	47.8
	虫取り	78.5
	魚取り	52.7
	草花摘み	81.7
	動物の飼育	62.4
	星の観測	38.7
	木登り	62.4
	その他	1.0
	多かった	66.7
II-5 自然行事	余りない	10.2
	どろどろい場所	23.1
	自然の環境	76.5
II-6 好きな所	人多的場所	16.3
	家の中	6.0
	その他	1.2
	N.A	1.2

第11表

II-7 感情を	表に出す	51.6%
	包み込む	8.1
	状況による	40.3
II-8 悲しい場面	すぐ涙を流す	51.3
	涙を流さない	46.5
	感じない	2.2
II-9 年上の面倒	どろどろい場所	47.8
	途中で泣き出す	37.7
	みない	14.5
II-10 抱きかかるとか	抱きかかるとか	25.3
	抱きかかるとか	34.9
	可憐に思える	37.2
	何とも思えない	1.0
	いじめる	0
	その他	1.6
	N.A	1.6

第12表

II-11 衣服	新しいものと高級	39.2%
	友達の服を借り	44.1
	関心がない	16.7
II-12 お宝探し	どろどろい場所	23.2
	かまわれない	15.6
	どろどろい場所	61.2
II-13 洋服や毛布	既製品が好み	21.0
	手づくりが好み	11.3
	両方	63.9
	無関心	3.8
II-14 持てた物	大切に育て	63.5
	乱暴に扱った	3.2
	その他の扱い	17.2
II-15 他人のもの	他人の服を借り	16.1
	盗み	12.9
	盗み	46.8
	お宝探し	27.4
	気にしない	12.9

第13表

Ⅳ-3 本を読む	好き	47.3%
	嫌い	19.9
	どちらでもない	32.8
Ⅳ-4 音楽を聴く	あった	31.7
	なかった	24.2
	どちらでもない	44.1
Ⅳ-5 小さい頃好きだった(経験回答)	小説を読む	18.8
	作曲する	2.7
	歌をうたう	38.7
	演奏する	25.1
	絵を描く	24.2
	ものを作る	23.7
	お菓子を作る	4.8
	踊る	12.3
	その他	0
Ⅳ-6 得意事	した	94.7
	しない	5.3

第14表

Ⅳ-9 テーマ	おもしろかった	21.0%
	時間がかかった	47.3
	みつからなかった	31.7
Ⅳ-10 イメージ	おもしろかった	25.5
	いじくり	40.3
	おもしろくない	24.2
Ⅳ-11 制作時間	たっぷり	53.9
	短時間	9.1
	決まった範囲	36.0
	その他	1.0

第15表

Ⅳ-8 人前発表	好き	37.8%
	嫌い	30.5
	どちらでもない	31.7
Ⅳ-1 学芸会発表	積極的	44.3
	協力した	53.0
	全く消極的	2.7
Ⅳ-1 学芸会出演	積極的	37.1
	出たけれど	36.0
	出たくない	25.3
	主役かよ	1.6
Ⅳ-2 注意するよと	素直に認めた	35.9
	更に意欲的に	22.4
	何とも	36.4
Ⅳ-3 工夫	なげ出す	5.3
	与ったに合わせる	32.8
	自分で工夫する	36.6
	どちらでもない	30.6

・中学校と国語・数学(算数)がほぼ近似値,むしろ中学校では数学の方が得意学科として国語を上まわっていたものが,高校時になって急激に減少していることがわかる。更に音楽・美術等の芸術科目も一様に減少している。得意学科という設定であったため単に“好き”または“できる”といった許容の範囲を含んではいないが,やや幅が狭いのではないかという懸念がもたれる。体育を除いて主要科目を大きく理数系と文系に分けるとその比は約34.5%対約60%で得意学科は文系が多い。

<項目Ⅱについて>第1表~第9表参照

特に一戸建住居が圧倒的に多く過半数が住宅地という環境である。また,遊びの仲間は同年令または年上・年下の子ども同志(男女)であったようだ。遊び場は宅地環境からもうなずける通り,路上・公園(遊園地)・校庭等が多い。しかし複数回答であることから一概にはいえないが,家の中で遊んだというのも数値の上では大きい。また,農村地帯に住居があるものが約20%いることから田畑や草地で遊んだ経験をもつものも多い。遊びの種類で活発なものやボールゲーム等が多いのは,本学学生の特色であろうか。更に,しつけについては,母親を中心に比較的大らかに礼儀やことば使い・作法などをしつけられたことがわかるが,危険を体験する前にあぶないからやめなさいと阻止されることは少なく,痛みや恐さを体験した上でコントロールすることを覚えていったことが伺える。

家庭的には恵まれた中で,のびのびと育てられたものが多いのではないだろうか。

〈項目Ⅲについて〉第10表～第12表参照

成長の過程での直接のかかわりは圧倒的に母親が多く、現在の在り様にはその影響を受けていることも少なくないと推察される。また、2・3は前記の遊び場所・仲間と同様の傾向にあるが、自然と親しんだ体験が非常に豊富であることが目につく。住まいが住宅地にあるものが多い反面、これだけ多くの体験をしていることは驚くべきことであったが、周囲に破壊されない自然があったのかまたは夏休み等を利用してどこかに出かけての経験であるのか、また頻度等については定かではない。しかし、人為的な場所より自然の環境の中にいる方が好きだったというものが多いことから、少なくとも遊び場がないと嘆く今日の都会の風潮よりも恵まれた環境の中で育っていることは間違いないようである。

情動面は、比較的激しく外向的なことが伺える。また、年下の子どもの面倒などはよくみたというものと途中であきたというものが近似値であるが、捨てられた仔犬を愛おしく思うものが過半数を占めることから、総体的に優しさや潤いを感じられる。自己主張の度合では、自分が着たい衣服を自分で選ぶという積極性を感じられるが、特別おしゃれということではなかったらしい。そして、既製品の洋服や玩具が豊富になっている年代であるが、特別に既製品に拘ることなく手づくりのものも素直に喜び、大切にし特に他人のものも欲しがったりもしないという様子が伺える。これらのことから、恵まれた自然の中で非常に子どもらしい体験を積み、優しく質実な幼年時代をおくったという全体像を感じられる。自己主張の度合は強いとはいえないが、情緒・情操的には豊かなものを孕んでいるのではないだろうか。

〈項目Ⅳについて〉第13表～第14表参照

読書が好きだったというものが約半数いるが、読んでいたものは⁶⁾絵本・童話が多く、以後文学小説・漫画という順になっている。また、よく音楽を聴く機会があったとするものが約30%いるが、どちらともいえないと曖昧なものの方が上まわっている。聴いた音楽の種類⁷⁾はクラシック・童謡・歌謡曲の順である。特に、歌をうたったり演奏したりすることが好きというものが併わせて過半数を占めていることに比べて、作文・作曲・絵画・工芸のような想像・創造的内容を好むものが総じて少ないことがわかる。更に文章で書き表わしたり踊ったりという、今回の課題探策に直接かかわると思われるものに好まない傾向がみられることも記しておきたい。次に、習い事・稽古事⁸⁾についてみると、6才前後から小学校修了または中学校迄を目途に、ほぼ全員が何かを習っていることがわかる。圧倒的に多いのがピアノと習字であるが、このことは筆者たちの育った時代には考えられなかったことである。

これらのことから、初歩的芸術体験として稽古事によるものが特筆されるものの、総体的には創造的指向が少ないのではないかとの疑問を残した。また、9～11の結果から思考の円滑さに欠けるものも多いのではないかと思われた。

〈項目Ⅴについて〉第15表参照

Ⅳ-8の結果から人前で発表することを積極的に好むものが約38%いるが、これは学芸会等への出演の傾向とも一致している。同様に、人前で発表するのがいやなものは学芸会への出演を拒否するというほぼ一致した傾向を示している。しかし、やや消極的参加も含めて発表という行為を受け入れるものが約70%を占め、学芸会等へも協力的な姿勢をもっていたことがわかる。また、2・3の結果からはわずかながら自我の強さも伺える。

これらのことから、行動的な面をもつものが比較的多いのではないかと思われた。

今回の調査で被験者とする学生たちの幼児体験をわずかながら探ってみたが、この学生たちはちょうど昭和30年代の終わりから40年代前半にかけて幼児期をおくっている。社会はおりしも高度成長の煽りをうけているが、まだまだ自然にも恵まれて豊富な体験をしていることがわかった。比較的外向・行動性に富んでいるのは体育系学生の特徴であろうか。また、多くのものが情操面が高揚するであろうと思われる経験をしていることも伺えた。このことに期待する一方、創造的指向に欠けるのではないかという懸念があることも否めない。

また、紙面の都合でデータの掲載は割愛するが、一人っ子または長女(①) — 内訳は13人: 131人で長女が圧倒的に多い — が全体の78%を占めていたことから、二女以下(②)のものと各項目について比較を試みた。その結果から特に着目できることのみ付記すると、自然に親しむ機会が多また、その環境にいる方が好きと答えるものは②の方が全体傾向をうまわっている。また、感情面を外に出す傾向も②が非常に強い。しかし、年下の子どもの面倒をみるという優しさや持続性では①の方がよく、逆に②はあきるといふものの方が多くなっている。また、衣服についての関心は②の方が圧倒的に強く、自己主張の一面をのぞかせている。読書や音楽への関心の傾向も②の方に多くみられた。更に、発表・出演することへの関心も②に強く感じられた。

これらは、全体傾向をもとに一人っ子または長女と二女以下のグループに分けて比較したものだが、今後の参考資料として検討を加えたいと考えている。

お わ り に

本稿は、イメージ発想について追究していくうえで曖昧な知識のもとに進めることができないと考え、非常に初歩的なことではあるが、基礎的な部分の再考からとり組んだ。その結果、「イメージ」「想像力」等安易に用いたことばの相違なること、深さをあらためて認識させられた。また、文献講読するうちに、課題解決のうえで成長過程、特に幼児期の環境やかかわった人・体験内容等を探る必要性を痛感させられ今回の調査に至った。

調査は、ポイント毎に項目を設定し被験者に内在するものの中から全体傾向をみたに留まったが、この資料を個人追跡のデータとしてファイルし、3年次にロールシャハ・テスト等を実施することで更に綿密なデータを揃えて検討したいと考えている。また、授業を通してイメージの発想から舞踊発想に至るまでを克明に追跡のうえ、併わせて実情を把握したい。

- 注1. 中沢和子「イメージの誕生」NHKブックス
 2. 竹内敏晴「ことばが劈かれるとき」思想の科学社
 3. 恩田 彰「創造性の基礎理論」明治図書
 4. 恩田 彰編「創造性の計画と実践」明治図書
 5. 恩田 彰「創造性の基礎理論」明治図書
 6. 絵本・童話 55.9%, 文学小説 29.0%, 漫画 28.5%, 推理小説 23.7% (以下略・複数回答)
 7. クラシック音楽 40.7%, 童謡 33.9%, 歌謡曲 25.4%, ポピュラー音楽 13.6%
 (以下略・複数回答)

8. ピアノ・楽器 68.3%, 習字 64.0%, 舞踊 15.1%, 絵画 10.8% (以下略・複数回答)

<引用および参考文献>

- 恩田 彰(編) 「創造性の基礎理論」 1968 明治図書
 " 「創造性の開発と評価」 1968 明治図書
 " 「創造性の計画と実践」 1968 明治図書
 中沢和子 「イメージの誕生」 1980 NHKブックス
 竹内敏晴 「ことばが劈かれるとき」 1979 思想の科学社
 藤岡喜愛 「イメージと人間」 1981 NHKブックス
 S. K. ランガー 「芸術とは何か」 1967 岩波書店
 M. メルロー・ポンティ 「知覚の現象学Ⅰ」 1980 みすず書房
 " 「知覚と現象学Ⅱ」 1980 みすず書房
 R. カイヨワ 「遊びと人間」 1970 岩波書店
 J. ピアジェ 「遊びの心理学」 1979 黎日月書房
 林真幾子・田川典子・高橋繁美 「舞踊創作に関する一考察～想像から創造への過程～」
 東京女子体育大学 紀要 9号 1974
 松田岩男 「運動と感情」 雑誌「女子体育」 1981・10月号